

小田原史談

第112号

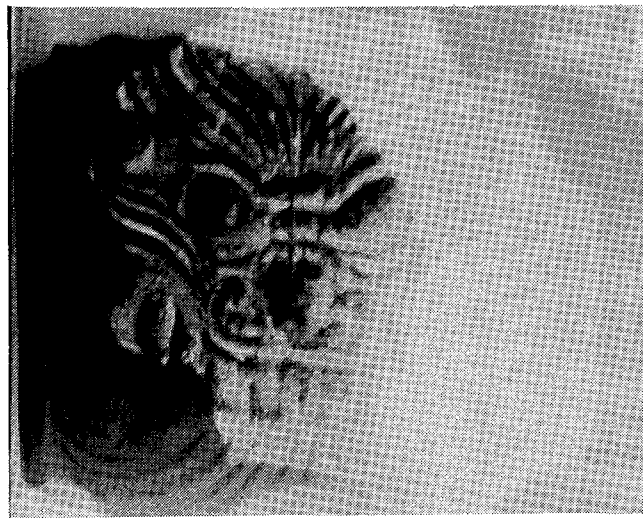
発行所 小田原史談会
小田原市南町2-3-21

千代台廃寺鬼瓦は武蔵 国分寺出土鬼瓦より先に 作られていた

内田 盛雄

小田原市千代五四二番地千代廃寺址より出土の鬼面文瓦が、武蔵国分寺出土の鬼面文瓦と似ている点について、当初から私は、両者の共通点を比較し、スライドで合せてみてから同一原画、もしくは同一范説をとっていた。両者の瓦が、昭和五十五年四月二十九日〜六月一日まで、奈良国立博物館で並んで展示されたことは有史に残ることで、まだ記憶に新しい。しかし武蔵の鬼瓦の実物に、お目に掛ることが出来ず、細かい調査が出来ないので何とも言えないでいた。永年の念願がこの程かなった。武蔵の鬼瓦の持主は、私が所属している中央画壇の国画会の版画家、平塚運一先生で

あった。氏は棟方志巧を育てた先生でもある。永年ワシントンに住んでいる為に会う機会がなかった。この程、会の人から、娘さんが新宿に住んでおられることを教えられて、浩子女史を知ることになった。そして半年余り、私の懇願は続いた。やっとの思いでワシントンの父親の平塚氏の御許しが得られることが出来たのである。私は胸が高鳴るのをおぼえた。古色の桐の箱に武蔵国分寺鬼瓦と墨書きされてあった。いつの間にか拝礼して、恐る恐る蓋を開くと、この日を夢みていた鬼面がそこにあった。こうして私は武蔵の鬼瓦と対面することが出来たのである。そして、今回



(A) 千代武蔵合成写真

自信を持って、発表に踏み出すことが出来ました。すでに、一部写真からの調査で立木先生の芦間の道で発表致しましたが、今回の原稿はさらに、実物調査の結果を加えた発表であります。

鬼瓦は千代、武蔵同一范であった!!
鬼面文瓦両者の瓦についての解析 (図参照)
一、鼻、中央線凸型状の范傷、(范、范木とあるは版、版木、で木型のことである) 鼻の頭と鼻筋との交り点をAと定め、同鼻筋の凸面の延長した鼻横シワ最上部交りをB点とし、ABを直線で結んだ線を延長して引いた。
二、上記の垂直線に対し門歯(両側牙と歯並びから門の型に似ていることから称する) 牙の上、最奥



(B) 千代台出土 六葉単弁蓮華文鏡瓦 (千代廃寺、最古のものである—高麗系)

(5)	(4)	(3)	(2)	(1)	
C ↓ E	D ↓ E	D ↓ C	D ↓ O	C ↓ O	(武蔵の比率)
—・七九	—・一五	—・四三	—・四〇	—・〇〇	(千代の比率)
—・七〇	—・一三	—・四三	—・三五	—・〇〇	(差)
〇〇〇〇	〇〇〇〇	〇〇〇〇	〇〇〇〇	〇〇〇〇	
〇〇〇〇	〇〇〇〇	〇〇〇〇	〇〇〇〇	〇〇〇〇	
九	二	三	五	〇	

歯、図で剛線部分(水滴型奥歯と称する)の先端をC点として、このC点より一、の垂直線に対し直角の線を水平に引き、一、の線との交り点をOとした。
三、向って左眉毛の先端をD点と定め、O・D線を引き、DCをも引く。
四、右額上のタテ髪の毛の中央から右に数えて、四本目の先端をE点と定め、CEを引きDEも引く。
五、三角形C・D・Eの内角は双方とも一致した。同様O・C・Dの内角も双方とも一致した。
六、辺C・O、C・D、D・E、各辺の差はほとんど粘度の収縮範囲であったすなわち武蔵の鬼瓦の一边O・Cを一、として各辺の比率を調べ、これを千代のものにも同様にして調べてみた時、次の様な結果が得られた。



(D) 千代廃寺出土 鬼瓦



(C) 武蔵国分寺出土 鬼瓦



(B) 武蔵 鬼瓦
これ等の差○・○九し○
・○二は粘土である為の
土質の差による。乾燥及
び焼き締め時の収縮によ
る誤差の許容範囲である
とみて差しつかえないも

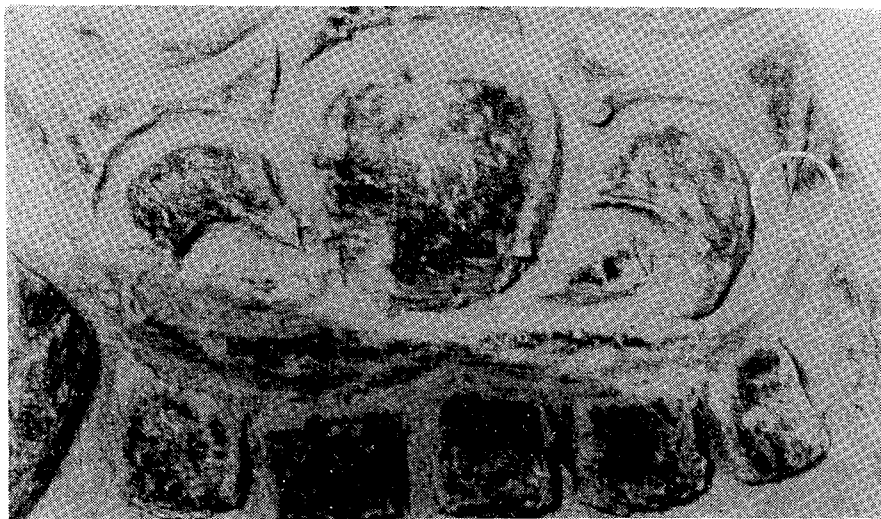
のである。むしろ当然起
つてしかるべきで差が起
らなければ不思議なくら
いである。
次に角度について、角三
角形の角はどうかを調べて

みた(角)で表現した)

(6)	(5)	(4)	(3)	(2)	(1)
△	△	△	△	△	△
E	D	C	D	O	C
C	D	E	O	C	O
D	E	O	O	O	O
C	D	O	O	O	O
D	E	O	O	O	O
C	D	O	O	O	O
D	E	O	O	O	O
C	D	O	O	O	O

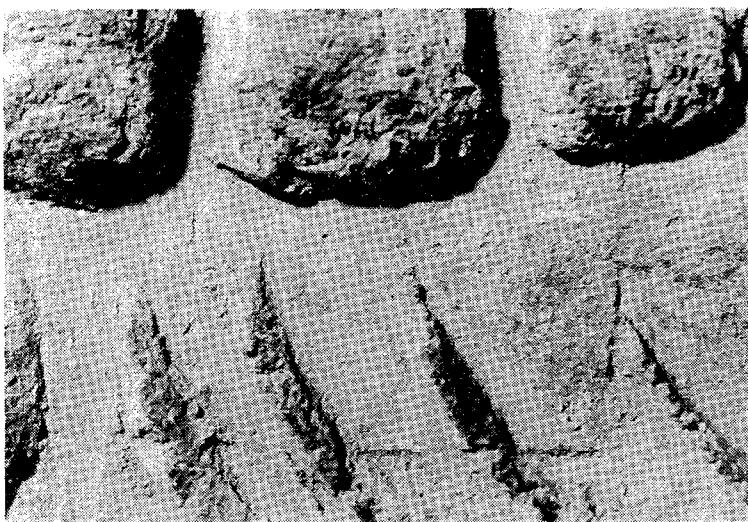
これ等三角
形の角度につ
いてはすべて
一致した。
類似箇所の
指摘と范傷に
ついて
瓦総体の図
形は類似形を
示している点
は一見の通り
である。
本件につい
ては両者のネ
ガフィルムを
重ね合せて合
成写真で証明
した通りであ
る(写真(A))
一、范傷につ
いて
(1) 中央鼻頭
から鼻筋、
額へとかけ
て、范傷に
より生じた
約○・三程
凸型線が、
走っている
(両者とも
に同様写真
(B))

門歯下約二・五程下
た処に武蔵のものに左右
に走った溝状のくぼみが
みられる。(写真(B))
これは門歯を囲んだ部分
(□形) 矩形の差し込み
式にこの部分のみ版を作
り変え別版木を差込んだ経
跡がみられる。(図点線
内) 尚上部にも両鼻孔の
中央を左右に横ぎった線
がみられる。(写真(B))
千代の鬼瓦にライトを当
てて細く観察してみると
同様である点が明らかに
判明した。武蔵に比べると、
それ等は、極めて密
であることが解る。この
ことは、はめ込みに、が
たつきがない范作成され
た初期に瓦が造られたこ
とが判る。そして武蔵の
門歯下の溝状部分に当る
箇所はヘラで修正すると
云う丁寧な仕事をしてい
る跡がみられる。(写真
(B)) 以上の点から武蔵の
ものは范が使い古されて
から使用しており差込み
部分の板にすぎ間が大き
くなって現われた范傷の
溝である。(写真(B))



(3) 下部)
 武蔵のものに中央門歯
 一個をはさんで左右の歯
 と髭を串差にした凸型の
 范傷が発生している。写
 真(回)千代のものには、こ
 れはみられない。この点
 一見異っているが、私が
 范木作成し復制を試みた
 時この訳が解明された。

何度となくたたいて押し
 型を取っている内に木の
 繊維がたたかれた。振動
 や、こびり付いた粘土を
 ヘラでひっかく時繊維状
 に版木がはがれて、凹が
 生じ溝が出来る。次に粘
 土を押し付けて型を取る
 とこの溝に粘土が入って
 凸型の范傷が発生する。



(G) 千代鬼瓦 門歯右側
 (千代のものにも入版の跡がみられる「状のもの」)

このことから、千代の
 瓦の方が范が新しく傷も
 ない点か先作であると云
 える(写真(G)、(H))
 (4) 范の全体的な劣化につ
 いてみると両髭門歯鼻穴
 の周囲にかけて、鼻、
 しわ、両眼の眼尻周囲に
 ついて、千代のものは、
 非常に新しい感じのノミ
 の跡を残している。武蔵
 のものは全般的に丸味を
 帯び范が使い古されてい

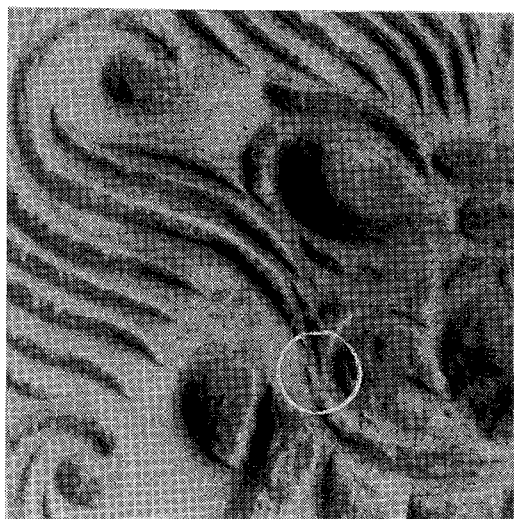
ることが解る(写真(K)武
 蔵と(L)千代と比較参照)
 二、類似点について
 (1) 両牙の内側にある門歯
 向って左端は、右端のも
 のより大きい。左右とも
 型式、形状が同じである
 左口右口である。(写真
 (C)、(D))
 (2) 中央門歯の上部がへの
 字型で共に髭の左右中央
 へその先端が向っている
 (写真(回)、(F))



(H) 千代鬼瓦 門歯左側
 (溝状をヘラで修正している)

(3) 小鼻が向って左三日月
 型に対し右は曲玉型であ
 る(写真(回)(F)比較参照)
 (4) 向って左の肩下のツヅ
 ミ型(回(回)部分)に左上
 部よりくい込んでいる堅
 髪の入り込が共に凹型に
 なっている(写真(I)(J))
 そして、ツヅミは左の方
 が右型より小さく、右の
 ものは右端下部がトゲの
 様に鋭く細く針状に兩者
 共下にとがっている(写

真(回)(F)の白丸部分)
 (5) 左右眼元の切り口が類
 似である(写真(回)(L))
 (6) 向って左の髭が上に伸
 び上った切れ目の所と左
 上から下って来た堅髪が
 が同点で交る部分髭の切
 れ目が下側で、堅髪の方
 が内側に入っている(写
 真(I)(J)白丸部分)
 (7) 右側牙の内側の部分が
 公に凹んだ状態を呈して
 いる(回(回)線部分写真(回



(J) 千代 鬼瓦



(I) 武蔵 鬼瓦

(F) 鼻筋の最下部左端は斜めに刀先の様な形を示し

ている点は両者共同様であるが右端は武蔵については欠落している、した



(K) 武蔵 鬼瓦 (范が古くなって全体が丸味を帯びている)

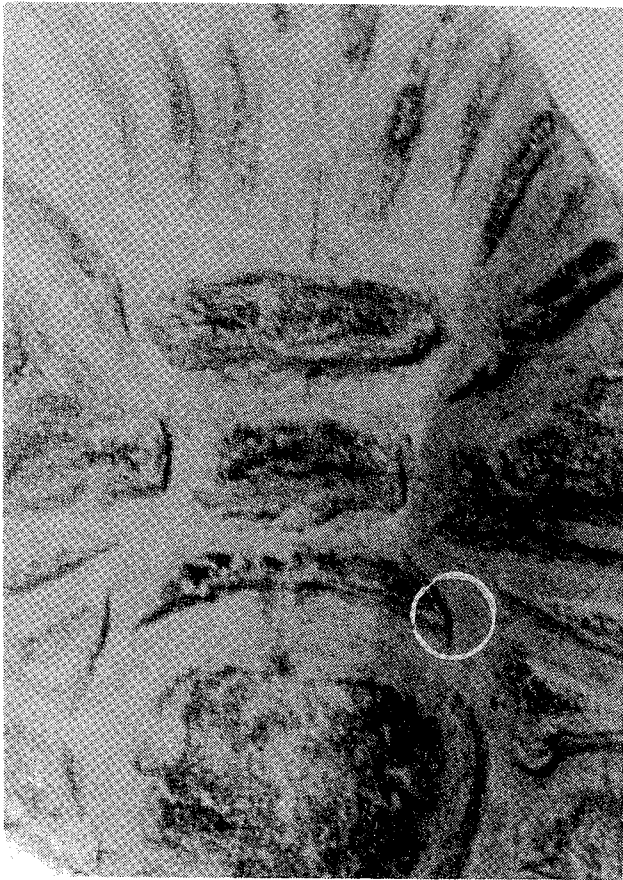
(9) 鼻筋最上部と右目元の相間に右眉の先端が同様に入り込んでいる(写真(K)(L))
(10) 左牙の奥歯の形が水滴型を共に示している(図四部分写真(I)(J)参照)
(11) 鼻筋最下段の刃先型の傾斜にそって斜線を引くと両者共門歯の内側一番

目の歯の右上先端と交わり、上はE点と交る(図太線参照)
(12) 門歯中央の歯右端線にそって上に直線を延長すると鼻筋の最上部の右端を通り、その上部の堅髪先端Eと文る(図太線参照)
(13) 向って右ツヅミ型の左端下が玉型に、両者共クツツしている(図太線部分写真(F)(G))
三、異っている点について
(1) 范傷の項(2)でのべた門歯下、約二・五厘の所の范傷による溝である。こ

件は、一項の(2)でのべた通りである。
(2) 同項(3)でのべた門歯串差し傷についても同項でのべた通りである。
(3) 二項(8)でのべている鼻筋の最下部右の欠落については同項でのべた通りである。
(4) 両者のネガ合成写真で解るが、鬼瓦のアゴに当る部分すなわち屋根の棟に載る部分の弓型欠き部の違いについては、瓦の製法文献を調べると、この部屈は各棟の向きによって、それぞれの場所の型をとって、半乾きの時型に合せて切り落して造

っているものでそれぞれ合わないのが通例である。
(5) ほほの毛波武蔵七本(但し右側)千代八本(但し左側)については両者共、反対部屈であり武蔵向って左側欠損、千代右側欠損の為、この点については必ずしも右左同じ本数に作られていたとは限られず、現存する瓦からは決定付けがたく、論拠とはならない。
(※以上は写真による比較である)
四、武蔵鬼瓦実測による千代鬼瓦との比較
平塚氏所蔵の武蔵鬼瓦を私がノギスで実測し、原

- 図に記録し千代の実測値と比較した結果である。
- (1) 鬼面の門歯向って
右より1歯2歯……
5歯としこれ等の歯の中をそれぞれ測ってみた。
- (武蔵) (千代)(差)
- 1歯 二〇 二〇〇
 - 2歯 二二 二二〇
 - 3歯 二一五 二二五〇
 - 4歯 二〇五 二〇五〇
 - 5歯 一六二 一六二〇



- 粘土製品であるにもかかわらずまったく一致したのにはただ驚くばかりである。
- (2) 左牙の奥の奥(図四線部分)水滴型歯(差)
- (3) 小鼻の巾、髭、ツヅミ等について
- | | | |
|--------|-------|-------|
| 右小鼻の巾 | 二・六五糎 | 二・六五糎 |
| 左小鼻の巾 | 一・八五糎 | 一・八五糎 |
| 左髭の長さ | 六・八〇糎 | 六・八二糎 |
| 右ツヅミ巾 | 四・〇〇糎 | 四・〇〇糎 |
| 左ツヅミ高さ | 三・二〇糎 | 三・二七糎 |
| 左右目元間 | 三・三〇糎 | 三・三五糎 |
- (4) 鬚(ノミ)の彫り跡について
- 向って左の眉上部背の部分で鬚が中央より数えて五本と六本目の間の部分に
- | | | |
|------------------|------|------|
| 千代 鬼瓦 | 〇・〇七 | 〇・〇七 |
| (范が新しくノミの跡がみられる) | 〇・〇五 | 〇・〇五 |

にもまったく同じ位置にくっきりと四つのノミの跡が残っていたのにはびっくりきようてんしてしまつた。そして門歯の部分で、私はこの両者が同一版により造られたゆへに、総括として

五、総括として

武蔵の鬼瓦よりも調査の結果、千代の鬼瓦が先に造られていたことになる

総体的に観て、千代のものは粘度も精製水鍍されたもので小石などの混りがなく、したがって出来もきれいに仕上がっているしプレス(圧力)も大きい

ていて細部が明確に現われ、きわめて丁寧な仕事となされている。これに比べ武蔵のものは、粘度は荒く、水鍍なしで小石(大豆)も、混じっており、作りも粗雑で、プレスが完全でない。版面の荒れ(いたみ)により鬼面の表面全体に肌荒れが生じている、このことはカメラマン(小泉隆司)の発言からもうなづける同じ高さと露出、シャッター速度、印画紙、現象薬等合せて現像しても武蔵のものは、粒子が荒れてしまふと云う結果が出た。このことは木版面が粘土中の小砂によって凹凸を生じて版木が古くなるほど粘土との混りが悪くなる結果が肌面の表情を提することにある、

一般に古い時代ほど土作りに手か加えられ細かい粘度が使われていると云われる。武蔵国分寺造立は天平九年(七三九年)聖武天皇の国分寺詔命より四年前、行基により造立されたと伝えられます。天平十二年七重の塔及び四天王堂を建て

(1) 思考されること。

日本書記……崇峻天皇の元年(五八八年)に百濟より仏舍利と共に僧、寺工、画工、總盤博士(塔九輪の台盤を作る技士)それに瓦の技術者である瓦博士など多数の人が献上されたとして記されている。これによると四人の瓦博士は、麻奈文奴(まなもんぬ)、陽貴文(ようきもんぬ)、懐貴文(りようきもんぬ)、昔麻帝弥(しやくまたいみ)の四人が渡来したと云う。又元興寺伽藍縁起では、麻邦文奴(まなもんぬ)、陽貴文(ようきもんぬ)、布懐貴(ふりようき)、昔麻帝弥(しやくまたいみ)となつています。いずれにしてもこの様な瓦博士が渡来したことに相違はなく、蘇我馬子はこれ等の工人を中心

る東大寺式で壮広な寺院であったとされています。この鬼瓦よりもさらに古い時代すでに、千代台にこの寺院より早く、恐らく同じ瓦師により作られたであろう伽藍が聳えていたこととなります。このことは何を意味するものでありましょう。この疑問と謎を解くことは余りにも大きな問題であり概説をくつがえすことになりません。

として、大和平野南部へ飛鳥寺(法興寺)を建てました。崇峻五年(五九二年)には仏堂(金堂)と歩廊が造られ、翌年の推古元年には塔を建てはじめ五九六年には塔が完成しているの瓦博士の活躍は大変な忙しきであったことが想像されます。六世紀にかけて寺院の建造に伴って多くの瓦士が渡来したのであることがよくいに想像出来ます。

韓国系日刊紙「統一日報」連載の「遺跡発掘別抄」韓国文化財研究所長金正基博士、記によれば一九五七年頃東京国立博物館が主宰して武蔵国分寺跡の発掘調査が行われ金正基氏も東大グループの調査員として参加したが、その時の感想を次の様に記している。この調査した折、根石群附近の基礎の礎石下の構造であった礎石が失われ、その下の根石を調査した所、どうも根石群附近の基礎が不安定であったため一応これらを実測、撮影して、根石をとり出し、その下を調査した。ところが意外にも根石の上に一層の基礎土があり、そのすぐ下にやや小型の河原石を方形に敷きつめ、石敷が発見された。再び

東大寺式で壮広な寺院であったとされています。この鬼瓦よりもさらに古い時代すでに、千代台にこの寺院より早く、恐らく同じ瓦師により作られたであろう伽藍が聳えていたこととなります。このことは何を意味するものでありましょう。この疑問と謎を解くことは余りにも大きな問題であり概説をくつがえすことになりません。

この石敷の半分ほどを残してその下を掘ると同じように一層の基壇土の下からまた石敷が現われた。こうして、石敷は礎石の下に方形に数層敷かれていたのであった。この様な例は初めて確認された工法で他の先生方も驚いておられた。現在韓国の慶州で行なわれている。皇龍寺跡の発掘調査で塔基壇全面に直径二〇〇釐内外の河原石を敷つめてはその上に粘土を入れ突き固め更に石を敷いて粘土で突き固めながら石の層を二十余層に積み上げ基壇を構築していることがわかった。あるいはこの方法が、日本に伝えられ簡略化されて武蔵国分寺金堂基壇が成立したのではないか、以上の記事によって武蔵国分寺の基壇構築方が新羅の三大名刹の一つである皇龍寺の基壇構築法に類似していることがわかる。以上のことからして武蔵国分寺の造立に渡来人の寺匠による築造が濃厚である。文献上からみると、「続日本紀」(靈龜二年(七六六年)五月辛卯以駿河、甲斐、相模、上総、下総、常陸下野、七国高麗人一、七九九人遷、于武蔵国始置高麗郡焉。相模にいた渡

来人もこの時、移動したことが解る。そして高麗郡が置かれたことを記している。さらに持統天皇元年(六七八年)四月に新羅の僧尼、百姓男女、二十二人武蔵国に安置し、同四年(六九二年)二月にも新羅人の「韓奈末の許満」(かんなまのこま)ら十二人を武蔵国に安置したと「紀」に記されている。私は千代廃寺の鬼瓦と武蔵の鬼瓦が同一民族によって造られたとすれば一箇所で焼いて運ばれたものか、あるいは転々と移動して焼かれたとするいづれかの説になるが、私は後者であると考える、それには

(1) 千代に於ても松田に瓦窯跡があること、武蔵に於ても窯場跡があることである。
 (2) 靈龜二年の文献上に相模よりの移民があること
 (3) 千代台廃寺、出土に、千代最古のものとして六葉弁蓮華文鏡瓦の出土があること。この鏡瓦は文様からみた場合もつとも古い様式の鏡瓦である。蓮弁の図案は大邸の慶北大博物館所蔵の蓮珠文(外区に蓮珠文をめぐらせた鏡瓦と酷似しており高麗系に属している鏡瓦である)
 以上のことからして、千代に武蔵より早く渡来人の寺匠により、造立された伽藍があったであろうことが容易に想定せられることになるのであります。

甲州史跡めぐり (武田氏滅亡遺跡探訪の会)

香川 政治

昭和五十六年八月三十日(日)午前七時藤棚前出発
 バス一台参加者五十一名
 コース
 小田原―須走―山中湖―河口湖―御坂町―勝沼―塩山―雲峰寺―塩山市―恵林寺(中食)―勝沼町―大善

の頃はカン／＼照り気温は曇りに急上昇残暑の厳しい中を(車内は冷房快適)朝早い関係が交通量も非常に少なくスムーズに走り山中湖畔で小憩の後一気には御坂峠を越え御坂町、勝沼町道路の両側一帯のブドウ畑もまたわかに熟した美味しそうなブドウの房を車窓より眺めながら塩山市から青梅街道を大菩薩峠の登り口裂石(37)に在る最初の見学地裂石山雲峰寺の麓に十時に到着、(予定より三十分も早く(車を降り参道まで徒歩数分(乗用車は本堂前まで行ける)、寺は小高い山の頂きに在り急勾配の石段(百数十段)一同元気に昇り切り、一同本堂前に集合、中野先生の本堂、庫裡(何れも重要文化財に指定)の建築形態その他についていろいろと説明あり、続いて一同本堂に参観、本堂に武田氏重宝の貴重な遺産孫子の旗一旗、日の丸の御旗章(武田家二十八代の重宝)、信玄公馬印旗等の宝物を拝観壯麗な建造物に後髪引かるる思いを残し乍らここを辞し塩山市に在る恵林寺に向う。

恵林寺十一時五十分着中食前に見学、直ちに境内並びに本堂に参観本堂裏手の夢窓国師の築庭として有名な庭園を拝観その素晴らしさに目を見張るばかり、廊下伝いに奥に進む途中右手奥の木立の中に武田信玄公の墓石がチラッと見え拝みつつ更に進むと廟所の真南に恵林寺明王殿(武田信玄(靈殿)に安置されている武田不動尊像は非公開の為拝観は出来ず残念!、寺を辞し境内にある一休庵にて中食を摂る。

中食後勝沼町大善寺に十三時五十分着予め中野先生より連絡してあったので任職が一行を直ちに本堂に招じ入れ着座大善寺の縁起、勝頼公夫妻一泊当夜の模様並びに正面に安置されている国宝の本尊木造薬師如来像日光、月光の三尊、御厨子(国宝)、十二神将像等について詳細に説明あり、一同安置されている仏像を身近かに拝観させて戴き、続いて客殿、書院に導かれ客殿、書院の裏庭にある大善寺庭園を拝観、この庭園は池泉観賞式蓬萊庭園で、江戸初期の庭園としては高野山の普門院、鳥取の興禅寺とともに江戸時代の日本三名園と云われる。石を自由自在に組合せ枯滝や鶴などを表現してあり、他では余り見られない。
 尚我々に特別時価六千万円もするという県の重要文化財の指定を受けている刀身一筋余目方四寸の大太刀

を拝見任職の好意に感謝しつゝ本日最後の見学地武田勝頼夫妻自刃の地 田野、天目山麓に在る景徳院に向う。十五時十分着、直ちに山門に入り本堂の側に甲将殿がありその道筋の右手に勝頼夫妻の生害石あり、その前に立ち止まり武田氏滅亡の悲話の数々を偲びながら夫妻の冥福を祈念しつゝ甲将殿に参観着座の上中野先生の説明あり。殿内には勝頼公夫妻と勝頼長男信勝三人の位牌が安置され、夫人の位牌には「北條院殿模安大禅定尼」とある。また三人の木像が安置されている、端麗な夫人の姿に對面することが出来た。この廟所の裏に三人の墓があり、各々立派なもので中央が勝頼公、宝篋印塔で一丈二尺向って右が夫人の墓石で五輪塔一丈、向って左が長男信勝の墓石で五輪塔一丈である。
 三人の墓石の側には勝頼公や夫人に最後に共にした忠臣侍婢の供養塔が立ち並んでいる。中野先生の話によると、その中に妙法禅定尼、妙善禅定尼を始め妙華、妙経、妙観、妙世などの法名が多数刻されているのは、夫人に殉じた女房衆のもの、この時夫人とともに自害した女房衆は十六名で恐らくこの中には小田原

から夫人に従って行った女性も幾人かはあるのであろうと云っておられるが、それやこれやを四百年前の出来事に憶を馳せればその胸のつまる思いを残し乍ら寺を辞し車上の人となる。時刻は丁度十六時、中野会長さんは帰りの時刻が遅くなると皆さんに御迷惑がかかると大変心配されておられたが月末の日曜日で大したことはないだろうと往路のコースを取り御坂から河口湖まではそれ程の混雑もなく比較的スムーズに來たが河口湖畔から山中湖辺に近づくとつれ交通渋滞が始まり牛歩の如き状態この調子では小田原に何時に着くやら一同ジリ／＼須走りから幾分緩和するではないかと一縷の望を抱いたがそれも空に終り依然として前方は車、車の長い行列、蛇行山北からドライブアールの気転で二四六号線に別れを告げ脇道に入り平山、内山を経て関本より甲州街道を一気に南下（この間道路は閑散）小田原駅前二十時三十分到着全員元気に解散

以上のようなプランで一日意義ある見学の旅であった不参加の方々その後日お出かけの節参考とも各寺の縁起を記してみよう。

◎雲峰寺

山梨県塩山市上荻原に在

り臨濟宗妙心寺派裂石山雲峰寺は天平十七年(西暦)行基菩薩の開創したという古刹。永祿年間に入つて火災のため荒廃したが十一面觀音に災をまぬかれ、室町時代国主武田信虎(信玄の父)の再建で臨濟宗に改めたのが今の建物で本堂、庫裡、書院とも国の重要文化財であり、寺宝に孫子の旗、諏訪法性上下大明神の旗、日の丸の旗は何れも有名で孫子の旗は天正十年(一五八二)三月三日、新府城から敗走して來た勝頼父子が夫人とともに田野において自刃に先だつて侍臣に託して雲峰寺に納めたのが孫子の旗俗に風林火山の旗とも呼ばれ「疾如風、徐如林、侵掠如火、不動如山」の十四文字が染筆されている。

この語は兵書「孫子」争篇第七に

「故に其疾コト風ノ如ク其ノ徐ナルコト林ノ如ク侵掠スルコト火ノ如ク、知動カザルコト山ノ如ク、知リ難キハ陰陽ノ如ク、動クハ雷霆ノ如シ」の文中から取つたものである。

従つて、風と火は兵の動勢を表わし、林と山とは、その静態を表わしたものである。

武將信玄の命をうけて、「孫子」よりこの名句を擬んだのは、武田信玄の軍師

として有名な山本勘助晴幸であり染筆したのは国師、快川紹喜だと伝えられている。

日の丸の旗は日本最古のものとして知られる。

○本堂(重要文化財)
正面四十四尺側面三七尺、単層入母屋造椽皮葺で正面に唐破風向拝を付加し、動物の彫刻等も独特。

四面に縁を巡らし総門柱で側面の美しい曲線で流れる幾重にも重なつた懸魚のある破風と屋根先端の美観は驚異である。

庫裡、書院、仁王門と共に室町時代の建築の特徴をよく現わし、我が国でも極く少ない貴重な文化財である。

○庫裡(重要文化財)
正面三六尺側面六十尺、単層屋根切妻造り茅葺の大建築。

梁上中央に簡素な輪廓をもつた大きな板葺股をおき大きな美しい下線を描いた破風に懸魚を下げ大構造建築の全体をよく調和的に引き締めて壮観にして独特の落着いた壮嚴さをもっている。

○書院
正面四八尺側面三十尺。単層寄棟造り茅葺で、周囲に濡れ縁を付して正面内部は広い廊下となつており、外周りは明障子を立ててあ

る。内部は上段の間(床違棚、書院付)他は六室で、柱は面がとられ天井に猿類天井、室の境は菱格子を立て、落着いた雰囲気をもつ室町時代から始まつた書院の規準的なものである。

○仁王門(重要文化財)
正面二二尺五寸側面一尺一寸。八御門単層屋根入母屋造り茅葺で、仁王像二体を安置し、木鼻、懸魚、正面中央の葺股等彫刻の外観に室町末期の様式を伝えている。

○宝物
天正一〇年三月東八代郡田野の郷にて武田勝頼一行は小山田信茂の裏切りによる攻撃のために天目山より道を大菩薩峠に至り上州安中の城に落ちのびんと企てたが織田勢の追撃は激しく遂に自刃の止むなきところとなつた。その際敗残の兵は山路を逃れて当寺にたどり着き、左の宝物を納めたと伝える。

①日の丸の御旗章(武田家二十八代の重宝)
②孫子の旗(信玄公の軍旗、金字略して「風林火山」よく知られている。)
③諏訪法性上下大明神旗(信玄公護身旗、赤字に金字囲りに黒梵字が併書してある)

④信玄公馬印旗(信玄公馬前の標識、赤地に黒の三

花菱紋を染め抜いている)その他沢山の遺品がある
以上縁起書より

◎恵林寺
乾徳山恵林寺は山梨県塩山市に在る。代々甲斐国主武田氏の絶体的な庇護を受け、武田氏が滅亡したあとには徳川氏、徳川幕府の手厚い外護のもとに、戦国時代以後は甲斐国における臨濟宗妙心寺派の拠点として法灯を輝やかせてきた名刹である。

恵林寺は今から六五〇年前の元徳二年(西暦)九月、甲斐牧の荘の領主であつた二階堂出羽守貞藤(号して道蘊)が時の名僧夢窓国師に深く帰依し、自分の邸宅を禅院に改めて国師を招請したのに始まる。二階堂氏は鎌倉時代末期、北条高時を執権とする鎌倉幕府の要人で、甲斐牧ノ荘のほか三河の重原荘、相模の懐島(現茅ヶ崎)などを所領していた。道蘊の祖はもともと伊豆の武士で源頼朝に属し、頼朝の武家政権確立にあつては、甲斐源氏の頭領、武田信義(武田氏の祖)等と共に活躍し、その功績によつて政所寄人の要職をつとめ、また後には執事などをもつとめている

以来、子孫が要職を世襲し、道蘊の代には執権補佐をつとめるようになり、幕

府の首脳として活躍した。後醍醐天皇の配流や幕府の重要な政治問題には常に参画していたようであり、鎌倉幕府の中心的人物であつたと云えるだろう。その後幕府の崩壊により道蘊は元凶として捕えられたが、かつて「正中の変」が事前に発覚した際、道蘊が後醍醐天皇はこの事件には無関係であると強く弁護したことがあり、これによつて死一等が減ぜられ、そのうえ同皇による親政下で寄人(合議官)にも登用された。

さて夢窓国師を開山として開創された恵林寺は、国師の高徳を慕う求道の徒で寺勢は高まり、とくに元弘二年(西暦)には幕府討伐の先鋒となつた細川頼氏が恵林寺に参禅し、頭氏の紹介で足利尊氏も恵林寺に国師を訪ねている。この縁でのちに尊氏が御醍醐帝の追福のために国師を招請して天龍寺を開基している。

夢窓国師のあと恵林寺には国師の法嗣である満翁明道、第三世に曇翁、第四世に無元などが入山、さらに古先印元、明叟、香哲、龍漱周沢、絶海中津などいづれも臨濟禅の代表的な当時の名僧学識とされた高僧が助命により輪番入寺した。

こうして恵林寺は一段と

法灯の輝やきを深めながら戦国時代を迎えることにならるが、永禄七年(一五七六)、武田信玄は当代随一の傑僧といわれた快川紹喜(大通智勝国師)を美濃、崇福寺から招請、寺領など三〇〇貫文を寄進して牌所(菩提寺)と定めた。

天正元年(一五七三)四月、信玄が信州駒場の陣中で五三歳で病歿した際、遺言によって三年間は喪が秘されたが、同四年四月、快川国師を大導師として恵林寺で大葬儀が執行され同寺に葬られた。

天正十年(一五八二)四月三日織田軍の兵火により恵林寺は焼打ちを受け、紅蓮の焔に包まれた三門楼上で快川国師は百余人の僧侶とともに「安禪不必須山水、滅却心頭火自涼」と唱え、泰然自若として武田氏の滅亡に殉じ火定された話は有名である。

同年六月に本能寺の変があり、七月に甲斐の国へ入った徳川家康は、快川国師の高弟、末宗瑞暲禪師が国師の命により火中より脱出して野州(栃木県)那須の雲蔵寺にひそんでいるのを知り、末宗禪師に恵林寺を再興させた。三年後に旧観に復するほどに恵林寺は再興するが、明治三十八年二月に失火によって本堂、庫

裡、書院などが再び全焼、現在の伽藍は明治末の建物である。

江戸時代中期の宝永二年(一七〇五)、甲斐十五万石の領主となった柳沢美濃守吉保とその子甲斐守吉里は恵林寺を厚の外護し、とくに信玄公一三三回忌の大

法要を執行した際には御霊殿などの造営、修復を行っている。吉保は生前自らの菩提寺、龍華山永慶寺を甲府に建立したが、吉里の代で大和郡山(奈良県)へ移封される際に恵林寺へ吉保定子夫妻の墓を改葬、多数の豪華な大名調度品を奉納している。現在の恵林寺の鐘は永慶寺の旧蔵である。慶応四年(一八六八)の寺記によると、恵林寺境内には十五の坊院、庵があり、末寺は五九ヶ寺に及ぶと記されている。また寺領地は信玄時代の寺領に加えて徳川家康が武田不動尊の灯明料として更に五九石余を寄進、境内地だけでも実に三六、四〇〇坪を有し、山林も一里四方であったと書かれている。

乾徳山の山号は、開山夢窓国師が笛吹川上流、徳和の乾徳山で一夏面壁の修業をした因縁によるものと伝えられ、庭園は夢窓流の庭園としても国指定の名勝となっている。

◎武田氏に殉じた快川国師 安禪不必須山水 (あんぜんかならずしもさんすいをもらはず)

滅却心頭火自涼 (しんとうめつきやくすればひもおのずからずし)

天正十年(一五八二)四月三日織田信長軍の兵火に包まれた恵林寺三門楼上でこう喝破し、滅亡した武田氏の運命に殉じた戦国期の傑僧、快川国師の火定の話は余りにも有名である。

快川国師、諱名を紹喜といい美濃の人、もと土岐氏を名乗り美濃国守護職、土岐氏の一族であった。土岐氏は後継者をめぐると同族間の内紛から守護代の斎藤氏に実権をうばわれ、応仁の乱以後は斎藤氏が美濃一國を支配した。このなかで斎藤道三などが知られる。

快川は妙心寺の仁岫宗寿の法を継ぎ、恵林寺に入山するまで美濃、崇福寺に住山していたが、天文二四年(一五五三)弘治元年、恵林寺を辞して信濃国(諏訪、慈雲寺、木曾、竜源寺)へ帰ることになった天柱玄長の推薦により恵林寺に入った翌弘治二年(一五五二)再び美濃へ帰りその後任に京都、天竜寺から五山派有数の学僧として知られた策彦周良が

入山した。このあと永禄六年(一五七六)からは美濃、大円寺の希庵玄密が住した。希庵はのちに妙心寺三八世となった名僧であるが、老齢のため一年たらずで恵林寺を辞することになり、永禄七年(一五七六)十一月、信玄のた

つての招ぎに応じて快川が再度入山することになった喜んだ信玄は三百貫文の寺領を寄進するとともに自己牌所と定めた。

快川は学僧として隠れなき名僧であったが、また気槩と気骨にあふれた人物でもあった。美濃国守斎藤義竜との間で悶着を起したとき「汝義竜は一國の主なるが、我は三界の師なり。三界の広さをもって何んぞ一國の狭きにかえんや」と絶縁し尾張の瑞泉寺に奔った「別伝騒動」は有名である

織田信長からの誘いも蹴って甲斐国へ来た快川は、単に信玄参禅の師にとどまらず、信玄、その子勝頼を積極的に支援し武田家のために活躍した。天正九年(一五八二)には快川の高徳が天聰に達し、正親町天皇より、天下の師表と称され「大通智勝国師」の称号が贈られた。

◎大善寺 真言宗智山派柏尾山大善寺は山梨県東山梨郡勝沼町

勝沼に在り元正天皇の養老二年(七一八)奈良時代僧行基が開創したと伝える。関東屈指の真言宗の古刹である。この寺は勝沼の東の町はずれに偉容を示している、柏尾山の中腹のゆるい街道の坂道を上った所に在る。

本堂は国指定の重文で、本堂内陣に武田信玄寄進の厨子に安置されている薬師如来と脇立の日光、月光両菩薩の三像も本堂とともに重要文化財の指定をうけている。

武田勝頼が夫人(北条氏康の娘)と天目山に落ちる前夜一泊した時夫妻は薬師堂に参籠して本尊薬師如来の前に端座して夜を徹して祈願をこめた。又夫人はこの時

西を出て東へ行って後の宿かしわをとたのむみほとけと一首の和歌を詠進して行末を祈った。

◎景德院 曹洞宗天竜山景德院は山梨県東山梨郡大和村野に在り、天正十年三月十一日(一五八二)武田勝頼、夫人等一族はこの地で織田、徳川の連合軍に挟まれ激戦

の末悲惨な最後を遂げ、武田家の歴史に終止符を打った地で有名である。

天正十年七月徳川家康が勝頼一族の菩提寺として、家臣尾畑勘兵衛に命じて建立されたのがこの寺で當時は日野寺といった。

創立當時は七堂伽藍を有する立派な寺であったが、弘化二年(一八四五)と明治二七年(一八九四)の二度の大火によって大部分焼失、当時の建物としては仏門を残すのみである。

寺の内外には、四郎作古戦場、鳥居畑古戦場、生害石、没頭地蔵、旗立松、片手切等の遺跡があり、武田滅亡にまつわる悲話の数々が残されている。

境内の甲将殿には勝頼公北条夫人、信勝の影像及び一族郎党の位牌があり、甲将殿裏にはそれらの墓がある。

編集部より

思い出にもなり又の訪問の参考にもなればと史跡廻りの記事を書いて頂きますが紙面の字数の関係から前後致します事御詫が致します。

尚皆様の原稿を御待ちし居ります。 杉崎